

平成十六年度後期企画展示
肥後の至宝展Ⅲ

宇城語展

「貝塚からのメッセージ」



字城語展

（貝塚からのメッセージ）

開催にあたって

熊本県立装飾古墳館では、『肥後の至宝展』と銘打つ展覧会を本館の企画展示として平成14年度からシリーズ化しました。このシリーズは、県内外から来館者いただく方に熊本の優れた考古資料等を紹介し、熊本の歴史のすばらしさを実感していただくための展覧会です。平成14年度は、「新発見・再発見 菊池川の古代遺跡」というテーマで、菊池川流域の発掘調査の成果を、平成15年度は、肥後の至宝展II「球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～」というテーマで、球磨地域の歴史の豊かさ、奥深さなどの魅力とともに、そこに生きた人々の故郷へ寄せる思いを紹介しました。

平成16年度は、これらの成果を受けて、肥後の至宝展III『宇城語展～貝塚からのメッセージ～』として開催いたします。

有明海に面した宇城地域。その美しい海は、現在も四季折々の恵みを私たちに与えてくれています。この豊かな有明海と人々の営みは、縄文時代の貝塚に見ることができます。有明海沿岸は、日本でも有数の貝塚群を誇る地域の一つとなっています。

今回の企画展示では、こうした宇城の貝塚調査の成果を基に、宇城地域の貝塚で見つかった縄文時代の土器や編籠など優品を選びすり展示しました。また、「宇城に生き、宇城で学び、そして宇城を深く愛した」小林久雄先生と、先生に係わった多くの研究者との触れ合いなど、関連する資料を交えて紹介しました。

そんな宇城の歴史や自然の豊さなど、その魅力を感じていただきながら、皆様の故郷へ寄せる思いや郷土愛を再度温めなおしていただく機会になればと思います。また、「環境の世纪」と言われる現代社会において、自然と共に生きていた縄文人たちが残した貝塚からの語りに耳を傾けて頂ければと思います。

最後になりましたが、企画展示の開催に当たりまして、展示資料の提供に御理解と御協力をいただきました、東京大学総合研究博物館、熊本市立熊本博物館、宇土市教育委員会、城南町教育委員会を中心とした多くの方々、記念講演会での講師を快くお引き受けいただきました、山梨県立考古博物館長の渡辺誠様に対して、厚く御礼申し上げます。

平成17年1月25日

熊本県立装飾古墳館長 小田信也

例　言

1本書は、平成16年度企画展示「肥後の至宝展Ⅲ『宇城語彙～貝塚からのメッセージ～』」の展示解説図録である。

2本企画展示では、宇城地域の縄文時代の貝塚を対象としている。

3展示資料は、宇土市の森貝塚、曾畠貝塚、曾畠貝塚低湿地遺跡、西岡台貝塚などで見つかった縄文時代前期・中期・後期の土器や石器、編籠、城南町の黒橋貝塚、阿高貝塚、御領貝塚で見つかった縄文時代中期・後期の土器や石器、骨角器、兎北町の大野貝塚で見つかった考古資料の中から優品を選び出した。また、本地域を戦前から研究し、その文化の特徴を明らかにしてきた小林久雄氏に注目して、その研究の1コマとそれに係わった研究者を紹介した。

4本書に掲載した写真資料については、各関係機関から提供を受けたもの、報告書等から転載したものの、本館学芸課で撮影したものがあるので、掲載写真毎に、その提供先を明示している。なお、撮影にあたっては、村田百合子氏の協力を得た。

5ゾーンⅢ「宇城がたり」の遺跡名等の表記については、各著作物の表記に従った。

6本書の執筆については、学芸課角田賢治が行った。

7本書の編集については、学芸課の協力を得ながら、主に角田がこれにあたった。

目 次

開催に当たって	2
例 言	3
目 次	4
ゾーン I 「プロローグ」	5
ゾーン II 「縄文との対話」	7
コナー1 「恵み」	9
恵み9／海からの恵み10／黒橋貝塚11／縄文人の台所道具12／乱獲のはじまり13／鹿のウンチク13／森貝塚13／縄文海進14／森からの恵み15／秋の味覚16／曾畠貝塚16／骨の體まで17／自然の恵みとともに18	
コナー2 「巧み」	20
巧み20／縄文の自然素材21／阿高貝塚22／土を活かす～縄文の造形美～23／御領貝塚24／西岡台貝塚25／土器の製作台26／草木を活かす27／縄文のドングリ歳27／縄文の工芸品31／カゴの編み方31／数千年の時を超えて32／石を活かす34／狩りと石器34／漁労と石器35／木工と石器35／ありがたい石を求めて35／骨を活かす36／魚捕りの達人37／石器～大物をねらう～37／狩りの達人37／自然を活かす38	
コナー3 「祈り」	40
祈り40／祈りの場40／自然で装う41／髪飾り41／耳飾り42／垂飾り42／腕飾り44／貝面45／自然への祈り46	
ゾーン III 「宇城がたり」	47
モース先生がやってきた48／大野貝塚49／肥後へ行こう50／ある考古学者の軌跡51／小林久雄51／考古学との出会い51／久雄と縄文研究51／縄文研究への想い53／土器編年とは54／小林久雄の九州縄文土器の編年55／阿高式土器55／森式土器55／曾畠式土器56／南福寺式土器56／御手洗A式土器56／御手洗B式土器57／西平式土器57／御領式土器57／オジちゃんのめはゾウの目58／「久」と「行」違い60／郷土に誇りを持とう60	
ゾーン IV 「エピローグ」	61
「宇城語展」関係略年表	63
出品目録	64
参考文献	67

ゾーン I

プロローグ

舟型の台付土器でし一丁畠桑ぞしげれる

小林 久雄



「一丁畠桑ぞしげれる」
提供：城南町歴史民俗資料館

プロローグ

ゾーン1

有明海と縄文人

四季折々の恵みを与えてくれている、豊かな海、有明海。
ありあけかい。

干潮時に現われる広大な「干潟」は、多くの生物を育み、私たちに海の幸を与えてくれています。阿蘇山麓から流れ下るいくつもの川から運ばれてきた大量の火山灰を含む土砂によって作り上げられた干潟は、まさしく自然の恵みの宝庫です。

そんな豊かな海に育まれた宇城には、遠い昔の縄文人たちが残した多くの貝塚があちらこちらに散らばっています。貝塚に残された多くの品々は、彼らが、いかに自然と共に生きていたかを物語ってくれています。

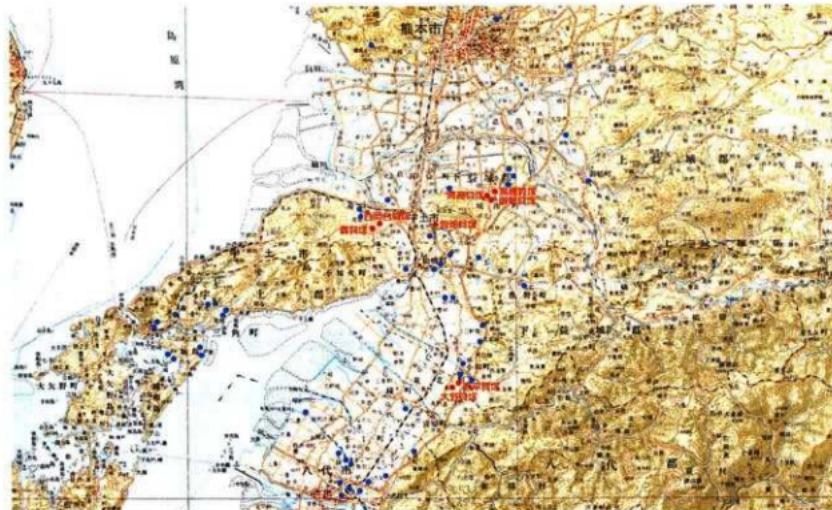
21世紀は「環境の世纪」と言われる中で、有明海での生活排水等による赤潮の発生や汚染、ノリの不作等、環境問題が大きな社会問題として取り上げられています。

「豊かな自然とは」、「自然と人間の共生とは」、私たちのこうした問いに、縄文人たちが残した貝塚は、多くのことを語りかけてくれています。

そんな宇城の貝塚からのメッセージに耳を傾けてみましょう。



2. 貝層剥ぎ取り断面：黒橋貝塚



『宇城語展』で扱う貝塚 (●は、その他の貝塚)

ゾーンII

縄文との対話

麦の穂の生ひ茂りて露しげき曾畠貝塚土器も見えなく

小林
久雄



阿高貝塚貝面



縄文との対話

ゾーンII

熊本県の中央部に位置し、有明海と緑豊かな里山に育まれた宇城。

豊かな海や大地は、私たちに恵みを与えて、長い間、人々のくらしを見守ってきました。そんな宇城での人々のくらしぶりは、縄文人たちが残した貝塚に記されています。

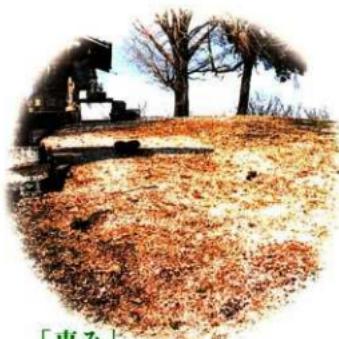
自然から四季折々の「恵み」を得ていた縄文人たち。

自然の素材を知恵と技で「巧み」に活かしていた縄文人たち。

自然に畏敬の念をいだき「祈り」をささげていた縄文人たち。

そんな彼らのくらしを育んできた宇城の自然環境は、「縄文のタイムカプセル」と言われる貝塚に垣間見ることができます。

「縄文との対話」では、そんな宇城の自然環境や考古と歴史について、「恵み」、「巧み」、「祈り」を切り口にして、見てていきたいと思います。



「恵み」



「巧み」



「祈り」

コーナー1 「恵み」

目前に広がる豊かな有明海と緑豊かな森。

宇城の縄文人たちとは、そんな自然から四季折々の恵みを得ていました。

ここでは、城南町の黒橋貝塚の調査成果から、黒橋ムラでの縄文人の暮らしをのぞいてみましょう。

春

春は、若芽の息吹出す季節。

野山では、心地よい日差しを受けながら、山菜取りにいそしむ縄文人たちの姿が見られます。一方、有明海の干潟では、シジミなどを求めて潮干狩りをする姿も見られます。緑が映えだすこの時期、新鮮な自然の恵みに、彼らの心も躍ったことでしょう。

夏

夏は、本格的な漁を始める季節。

海辺や川では、鉛や網を使いこなし漁をする縄文人たちの姿が見られます。彼らは、仕留めた新鮮な魚に舌鼓を打ったことでしょう。

秋

秋は、森が実りの宝庫となる季節。

縄文人たちは、イチイガシやカシ、クルミなど木の実の収穫に毎日のように森へ向かいいます。様々な実りは、彼らの食卓を華やかにしたことでしょう。

冬

冬は、森での狩りの季節。

イノシシやシカなどの獣を追って、男たちは野山を駆けめぐっています。一方、海辺の磯では、マガキとりをしている姿も見られます。脂ののった猪肉や鹿肉、身の詰まったマガキなどは、彼らのお腹を満たしたことでしょう。

冬

狩猟



春

漁労



若芽

スズキ

ボラ

夏

採集(貝)

採集

採集

採集

採集

採集

秋



縄文カレンダー
(黒橋貝塚でのくらし)



海からの恵み

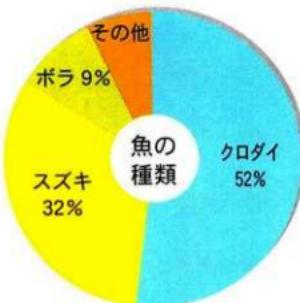
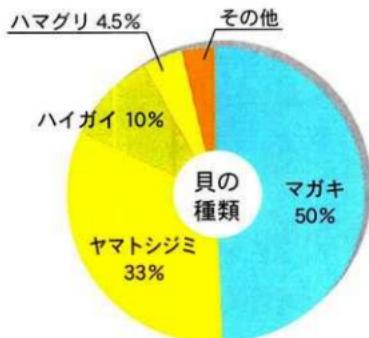
春から初夏にかけての有明海は、今も潮干狩りを楽しむ人たちで大賑わいです。そんな光景は、縄文時代の字城でも見られたことでしょう。

広大な干潟をもつ有明海は、縄文人たちにとっても、海の幸の宝庫でした。貝塚から見つかった大量のヤマトシジミやハイガイ、マガキなどはそのことを物語っています。また、遠浅の海では、クロダイやスズキなどの魚捕りも春から夏にかけて盛んに行っていました。黒橋貝塚などから見つかった石錘や浮子、刺突具などの漁労具は、そんな縄文人の姿を彷彿とさせてくれます。

黒橋貝塚で見つかった貝は、マガキ、ハイガイ、ヤマトシジミなど15種類です。中でもマガキ(50%)とヤマトシジミ(33%)が多く、次いでハイガイ(10%)となっています。ヤマトシジミやハイガイが多いことなど、まわりには、豊かな干潟があったことが分かります。

また、黒橋貝塚からは、様々な魚の骨も見つかっています。中でもクロダイ(52%)が最も多く、次いでスズキ(32%)、ボラ(9%)となります。これらは、内湾に住む魚です。春から夏にかけて、黒橋ムラの人々が近くの海で、盛んに漁を行っていたことが分かります。

このほか、マダイ、マハタ、サメなどの魚類、スッポンやイシガメなどの爬虫類の骨も見つかっています。



黒橋貝塚で見つかった貝と魚の種類



3. 石錘：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



4. 軽石製浮子：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

骨製刺突具：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

黒橋貝塚

黒橋貝塚は、城南町下宮地の雁回ざん北東端の低地にあります。今から約5000年前～4000年前の縄文時代中期から後期の貝塚です。ハマグリやマガキなど鹹水産の貝が中心となっています。

1972（昭和47）年の集中豪雨で浜戸川の堤防が決壊した際に、水田下に眠っていた貝層が発見されました。

阿高貝塚と隣接し、同じ年代であることから、一つの貝塚ではないかと考えられています。1980（昭和55）年に「阿高・黒橋貝塚」として、一括で国指定されました。



1989年調査時の黒橋貝塚

縄文人の台所道具

縄文人たちちは、料理するために様々な道具を使いこなしています。
に た
煮 炊きに使われた土器。

土器は、「煮る」「炊く」ことを可能にした画期的な調理具です。硬い肉は柔らかくなりま
すし、デンブン質、繊維質のものは消化・吸収しやすくなります。それまでの「焼く」だけ
の時代に比べれば、食生活は格段によくなつたはずです。曾畠貝塚低湿地遺跡から見つかった
土器には、煮炊きの時に吹きこぼれたススが残っています。料理人の一コマを想像させて
くれる品です。

木の実を磨り潰すための石皿や磨石。

縄文人们は、これらを使ってドングリの実を粉にしていました。その粉は、ドングリク
ッキーの生地などに使われました。

捕ってきた獣などをさばく時に使う石匙やスクレーバー。

これらを使いこなし、獣の皮を剥ぎ取ったり、骨から肉をそぎおとしたりしました。



7. 曾畠式土器：曾畠貝塚低湿地遺跡



8. 石皿・磨石：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



9. 石匙：轟貝塚



10. スクレーバー：轟貝塚

乱獲のはじまり

「巨人が食べた貝殻を捨てた跡」という、貝塚にまつわる巨人伝説があるほどに、大量の貝を貝塚に捨てた绳文人たち。

「自然の恵み」という言葉の背景には、食材を得るという人々の「意志」や「行為」が働いています。つまり、「自然の恵み」を得ることは、裏を返せば人間の「自然への影響」とも言えます。

人間は、自分たちの好みに合わせ、自然の中から好きなものだけを好きなだけを得ていきます。人間のそうした行為は、自然界のバランスを大きく崩していくことになります。満足感を限りなく求めた人間の出現は、自然界のルールに大きな障害をもたらすこととなりました。

それは人間による「乱獲のはじまり」と言えるかもしれません。

糞のウンチク

貝塚からは、「糞石」という人間や動物の糞がまれに見つかります。糞石とは、糞が化石化したもので、食事をとれば、食べ物は消化され糞なり体外に出ていきます。こうした糞石を詳しく調べていくと、植物の種や花粉などが見つかります。これらをもとに、当時の食料事情や生活環境などを復元することができます。森貝塚や黒橋貝塚で見つかった糞石は、当時の様子を教えてくれる貴重なウンチクと言えます。



11. 糞石：黒橋貝塚

森貝塚

森貝塚は、宇土市宮庄町にある貝塚です。宇土半島の基部の丘陵東端にあり、今から約6000年前の绳文時代前期前半の貝塚です。有明海東岸にある貝塚の中では、最も古い貝塚として知られ、ハイガイ、サルボウ、ハマグリなどの鹹水産の貝が多く見られます。その貝塚の規模は、東西約100m、南北約150mと推定されています。現在は、畑地となっています。



森貝塚（市指定史跡）

縄文海進

地球の気温が高くなれば、温暖化によって、氷河が溶け出して、海水の量が増えます。そうすると、海面が高くなり、海の水が内陸へと入り込んでいます。今日もそうした「地球温暖化」が問題となっていますが、今から約6000年前～5000年前の縄文時代前期にも、そんなことがおこりました。その現象を「縄文海進」と言います。

長い氷河期が終わり、縄文時代前期には、温暖化により気温が上がり始めました。それに伴い海面も上がり、現在より3～4m程高くなりました。有明海に面した字城でも縄文海進により、沿岸部が水に浸り、広い浅瀬や入り江ができあがりました。このような場所は、波も穏やかで、貝や魚などの絶好のすみかです。縄文人たちもこうした沿岸部でくらしを営み始めました。その時にムラの一角に作ったゴミ捨て場が、現在、貝塚として残っています。

今から約5000年前～4000年前には気温も下がり始め、海面が低くなる「海退」が進み、さらに約3000年前～2300年前には、現在の海岸線が作られました。

熊本での縄文海進の痕跡は、天草五橋が架かる島の岸壁に、今もくっきりと残されています。



縄文海進の痕跡（海食洞）



〔益城町史〕より)

森からの恵み

現在でも、旬の食材を求めて多くの人たちが森を訪れています。そんな光景は、縄文時代の宇城でも見られたことでしょう。

春には山菜類、秋には木の実類、冬には獸類と、森は、四季折々の恵みをもたらしてくれます。そんな森は、縄文人たちにとっても恵みの宝庫だったに違いありません。貝塚から見つかった大量のドングリ類や、イノシシやシカなどの獸の骨は、そのことを物語っています。

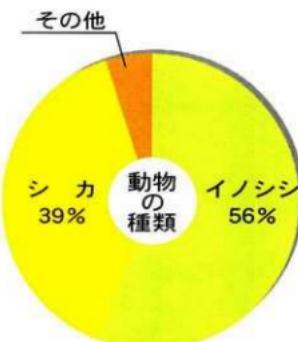
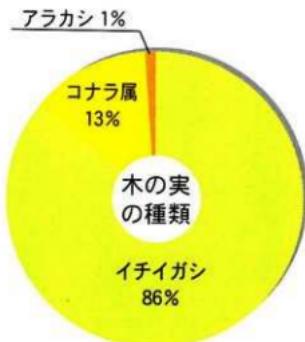
曾畠貝塚低湿地遺跡や森貝塚などから見つかった石鍔やカゴ、貯蔵穴などは、大地からの恵みを堪能していた縄文人の姿を彷彿とさせてくれます。

黒橋貝塚では、様々な木の実類が見つかっています。中でもイチイガシ（86%）が最も多く、クヌギやナラなどのコナラ属（13%）、アラカシ（1%）で、アク抜きの必要のないイチイガシがほとんどを占めています。このほか、桃やアブラギリ、チャンチンモドキなどの植物も見つかっています。

また、黒橋貝塚からは、大量の動物の骨も見つかっています。その総重量は、134kg。イノシシ（56%）が最も多く、次いでシカ（39%）と両者で全体の95%を占めています。縄文人たちが、イノシシやシカの肉を好んで食べていたことが分かります。その他、鯨やイルカ、イタチ、サル、イヌなどの骨も見つかっています。イヌは狩りの供として、また番犬として飼われていたのかもしれません。イタチなどは、食料や毛皮としても利用できます。



12. 石鍔：森貝塚



黒橋貝塚で見つかった木の実と動物の種類

秋の味覚

実りの秋。

縄文人たちにとって、木の実類は、大量に採れる食材として、また一時保存ができる食材として魅力的だったに違いありません。黒橋貝塚や曾畠貝塚低湿地遺跡から見つかった多くのドングリ類や貯蔵穴は、そのことを物語っています。両貝塚から見つかったドングリ類は、クヌギ、アラカシ、イチイガシなどで、このうち、イチイガシが圧倒的な量を占めています。これは、彼らが、アク抜きをせずに食べることができるイチイガシを選んで収穫していたことを示しています。ひょっとすると、イチイガシの豊富な森が集落を作るときの重要な条件の一つだったのかもしれません。

さらに、イチイガシ以外のアク抜きの必要なドングリ類は、水に晒したり、煮たりしてアク抜きをしていたと考えられています。

収穫したドングリ類は、カゴに入れられ、地中に掘った穴の中で、一時的に保存していました。彼らは、必要な時に必要なだけドングリを取り出し、秋の味覚を味わっていたのでしょうか。



13. 53号貯蔵穴 カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡



14. 石皿・磨石：黒橋貝塚

曾畠貝塚

曾畠貝塚は、宇土市花園町にある貝塚です。雁回山の南西麓に発達した舌状台地の先端部にあり、今から約5500年前の縄文時代前期後半の貝塚です。「曾畠式土器」の標準式遺跡としても知られています。

1986（昭和61）年からの曾畠貝塚に隣接した曾畠貝塚低湿地遺跡の発掘調査では、62基の貯蔵穴が発見され、21点のカゴなどの編み物の他、土器、石器などが発見され、縄文人の暮らしの様子が明らかになりました。



曾畠貝塚（市指定史跡）

骨の跡まで

黒橋貝塚では、多くの獸の骨が見つかっています。その骨の中には、刃物の傷痕が残っている骨があります。これは、縄文人たちが骨を割ったときについた傷痕です。彼らは、骨の中にあるミネラル等の栄養価が高い骨髓を得るために骨を割ったのではないかと考えられています。



15. 解体痕のある獸骨：黒橋貝塚



16. 削器：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

17. 石匙：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

自然の恵みとともに

現代生活では、季節を問わず、食べたいものを手に入れることができます。それは、より豊かな食生活を求めて、技術開発や品種改良などを行ってきた人々の知恵やたゆまない努力の結果と言えます。しかし、その一方で「旬の味覚」という言葉もうすれ、私たちは、季節感あふれる「食文化」をも忘れつつあるのではないかでしょうか。

自然の恵みの中で生きていた縄文人たちのくらしぶりは、「食の安全」が叫ばれる今日、私たちに何かを語りかけているのかもしれません。



18. 瓢箪：曾畠貝塚低湿地遺跡
(提供：熊本県教育委員会)



曾畠貝塚低湿地遺跡で見つかった瓢箪
(提供：熊本県教育委員会)

中国
御領貝塚

御領貝塚

御領貝塚

御領貝塚群

150m

御領貝塚

コーナー2 「巧み」 ●

貝塚からは、普通の遺跡では朽ち果ててしまうようなものまで見つかっています。宇城の貝塚や低湿地からも、粘土、草木、石、獸の骨や角など様々な材料で作った、くらしやまつりの道具などが見つかっています。それらは、縄文人たちの知恵と技術の優秀さを物語ってくれる品々ばかりです。

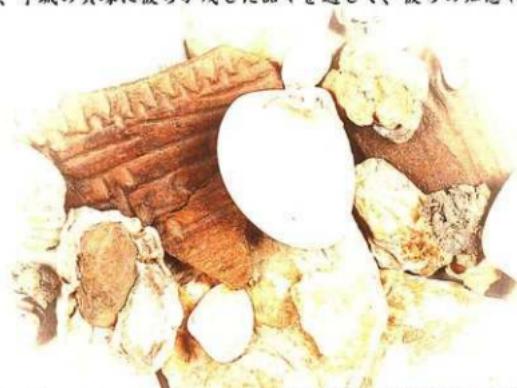
身近な石や骨を使って、様々な用途の道具を作った縄文人たち。

粘土を使って、煮炊きができる土器を作った縄文人たち。

蔓などを使って、ドングリ類を運んだり、貯えたりできるカゴを作った縄文人たち。

そこには、知恵や技術を駆使して、自然の素材を活かしながら、道具を作った彼らの「^{くわ}巧み」さがうかがえます。

「巧み」では、宇城の貝塚に彼らが残した品々を通して、彼らの知恵や技術について紹介していきます。



19. 20号貯藏穴カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡

20. カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡

● 繩文の自然素材

縄文の人たちは、自然にある素材を活かす達人でした。彼らは、素材の特性を活かして様々な道具類を作っています。

粘土は土器づくりの生地として、
蔓や植物はカゴの材として、
堅い石は斧などの材として、
鋭く割れる石は刃物の材として、
骨や角は鉛先や工具などの材として、
貝は腕輪などの材として、

そんな彼らの素材の活用法は、どれも目をみはるものばかりです。自然の素材を活かした彼らのくらしの道具をのぞいてみましょう。



21. 阿高式土器：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



22. 阿高式土器：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



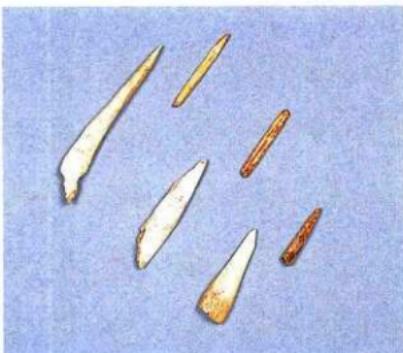
23. 石斧：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



24. 石皿・磨石：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



25. 石鏃：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



26. ヤス：轟貝塚



27. 骨製ヘラ：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



28
29

貝輪：阿高貝塚

あがい 阿高貝塚

阿高貝塚は、城南町阿高にある貝塚です。雁回山北東端の低地にあり、今から約5000年前の縄文時代中期の貝塚です。黒橋貝塚と同じくその中心は、ハマグリやマガキとなっています。

1916（大正5）年、浜戸川周辺の耕地整理の際に人骨が出土したことによって世に知られるようになりました。その後、多くの研究者たちによって、発掘調査が行われ、「阿高式土器」の様式遺跡としても知られています。



建物の裏手が阿高貝塚（国指定史跡）

土を活かす ~縄文の造形美~

縄文時代は、土器を使い始めた時代です。

この時代になると、土器を使うことで「煮炊き」ができるようになつたわけです。そして、縄文人たち^{うつわ}は、盛るための器、貯えるための器と、器の種類を増やしていきました。

黒橋貝塚で見つかった阿高式土器は、粘土に滑石の粉を混ぜて作られているため、ツルツルとした肌触りに仕上がっていいます。また、土器の表面には、木の棒で曲線や直線などを組み合わせた文様がつけられ、ふくらと丸みを帯びたその姿は、縄文人たちの造形美をうかがわせる品です。



30. 阿高式土器：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



31. 阿高式土器：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



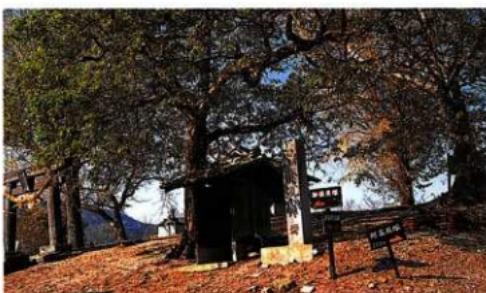
32. 中津式土器：黒橋貝塚

33. 繩文土器：黒橋貝塚
(縄文時代後期前葉)

34. 御領式土器：御領貝塚

御領貝塚

御領貝塚は、城南町東阿高にある貝塚です。雁回山北東端の洪積台地先端にあり、今から約3000年前の縄文時代後期の貝塚です。貝殻の98%以上が淡水産のシジミの貝塚です。「御領式土器」の標式遺跡としても知られ、1970（昭和45）年に、国指定されました。もともとは、面積5万m²におよぶ西日本最大の規



御領貝塚（国指定史跡）

模を誇っていましたが、大正期に貝層の大半が失われてしまいました。しかし、現在も一面シジミで覆われた白い小高い丘は、その一端をうかがわせてくれます。



35. 曾畠式土器：曾畠貝塚
(提供：宇土市教育委員会)



36. 曽畠式土器：曾畠貝塚
(提供：宇土市教育委員会)



37. 船元式土器：西岡台貝塚
(提供：宇土市教育委員会)

西岡台貝塚

西岡台貝塚は、宇土市神馬町に所在し、国指定史跡宇土城跡の一角にあります。西方約60mには、森貝塚があり、早くからその存在が知られていた貝塚です。1985（昭和59）年の発掘調査では、貯蔵穴5基が見つかり、縄文人の暮らしの様子が明らかになりました。また、当時、中四国地方で作られていた船元式土器も発見され、縄文人たちの交流の様子の一端もうかがい知ることのできる貝塚です。

土器の製作台

土器の底をよく観察すると、木の葉やクジラの脊椎骨の凹凸の痕がくっきりと残されているものがあります。これは、土器を作る時に使われた製作台の痕で、今の回転台（ろくろ台）にあたります。縄文の人たちは、この製作台に粘土をのせ、台を回しながら土器づくりをしていました。こうした製作台を使うことで、均整のとれた形の土器を作ることができました。縄文の人たちが、クジラの脊椎骨の製作台を使い、土器づくりに励んでいる姿を想像させてくれる品です。



38. 鯨骨：西岡台貝塚
(提供：宇土市教育委員会)



39. 鯨骨：黒橋貝塚



40. 土器底部：黒橋貝塚
(鯨骨痕)
(提供：熊本県教育委員会)



41. 土器底部：黒橋貝塚
(木の葉痕)
(提供：熊本県教育委員会)



42. 土器底部：黒橋貝塚
(鯨骨痕)
(提供：熊本県教育委員会)



43. 土器底部：黒橋貝塚
(鯨骨痕・木の葉痕)
(提供：熊本県教育委員会)



44. 土器底部：黒橋貝塚
(木の葉痕)
(提供：熊本県教育委員会)

草木を活かす

今日でも家具や工芸品など、様々な道具類の材料に草木が利用されています。縄文人たちも、そうした草木を活かした様々な道具を作っています。

木材は、家づくりの材、弓や矢、ヤスなどの柄として使われていました。また、落ち葉や木切れなどは、焚き物の材として、料理や暖をとる時には欠かせないものです。

こうした草木を利用した彼らの道具類は、数千年の時の中で、地中で朽ち果ててしましました。しかし、水分を多く含んだ土地からは、こうした材料の一部が見つかることがあります。

曾畠貝塚低湿地遺跡では、21点もの蔓や葛などで編まれたカゴが見つかり、当時の縄文人たちの生活の一端を鮮明に蘇らせてくれました。ここでは、曾畠貝塚低湿地遺跡から見つかったカゴをとおして、彼らがいかに草木を活かしていたかを紹介します。



45



46

植物のツル（第11層出土）：曾畠貝塚低湿地遺跡



47. 54号貯蔵穴 カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡

縄文のドングリ藏

曾畠貝塚低湿地遺跡や黒橋貝塚からは、ドングリ類を貯めておくための穴、つまり貯蔵穴がたくさん見つかっています。特に曾畠貝塚低湿地遺跡からは、61基の貯蔵穴が見つかり、その中から21点のカゴが見つかっています。それは、つい今しおまで縄文人たちがドングリ類を貯めていたかのような残り具合でした。

貯蔵穴は、深さ7~79cm、直徑が44~150cm

の大きさで、直徑100cm前後のものが多く見られました。中からは、カゴをはじめ、ドングリ類、重しに利用していたのか、人の頭ほどの自然の石も見つかっています。

曾畠ムラの縄文人们は、収穫した木の実類をカゴに入れ、集落の一角に設けられた貯蔵穴に大切に貯めておいたのでしょう。大切な食料となるドングリの貯蔵穴は、曾畠ムラの人たちの「ドングリ藏」として、ドングリ保存計画の一端を教えてくれます。



11号貯蔵穴断面：曾畠貝塚低湿地遺跡

(提供：熊本県教育委員会)



48. 34号貯蔵穴カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡



49. 12号貯蔵穴ツル：曾畠貝塚低湿地遺跡



50. 42号貯蔵穴カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡



51. 43号貯蔵穴カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡



52. 25号貯蔵穴カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡



53. 39号貯蔵穴カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡



54. 47号貯蔵穴カゴ：曾烟台塚低湿地遺跡



55. カゴ：曾烟台塚低湿地遺跡



56. 12号貯蔵穴カゴ：曾烟台塚低湿地遺跡



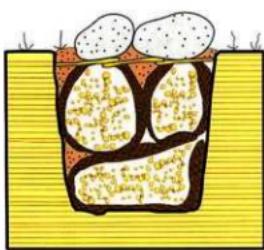
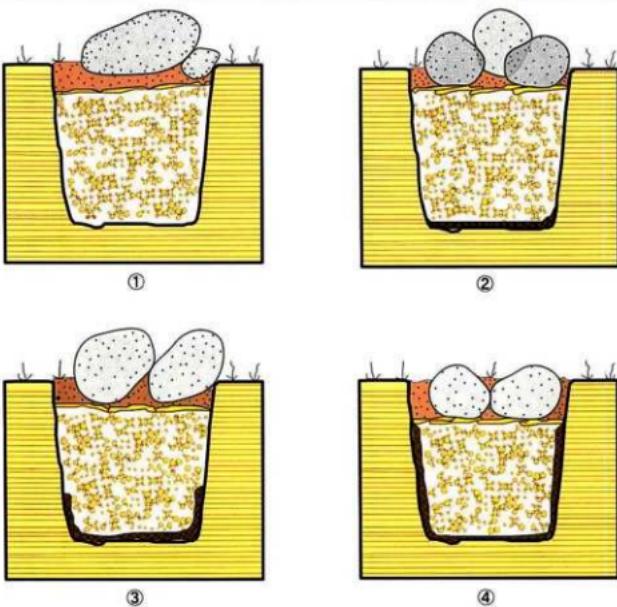
57. 植物のツル：曾烟台塚低湿地遺跡



58. 14号貯蔵穴カゴ：曾烟台塚低湿地遺跡



59. 62号貯蔵穴カゴ：曾烟台塚低湿地遺跡



⑤ さまざまなドングリの蓄え方

貯蔵穴推定模式図

- ①編み物製品を使用することなく、木の皮の蓋と重しだけのもの。
- ②底部にだけ編み物製品をしいているもの。
- ③浅いザルの様な編み物製品が底部にあるもの。
- ④深いバスケットの様な編み物製品に納めるもの。
- ⑤網カゴの口を閉じて、数個と一緒に貯蔵するもの。

〔『曾畠』より〕

9号貯蔵穴：曾畠貝塚低湿地遺跡
(提供：熊本県教育委員会)

60. 9号貯蔵穴カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡



36号貯藏穴：曾畠貝塚低湿地遺跡

(提供：熊本県教育委員会)



61. 36号貯藏穴カゴ：曾畠貝塚低湿地遺跡

縄文の工芸品

カゴは、現在の工芸教室でも人気のある工芸品の一つです。縄文人たちが作ったカゴは、彼らの巧みさを教えてくれる品です。

見つかった21点のカゴの材料は、アケビ1点、イヌビワ3点、ケヤキ1点、カシ類2点、樹木不明のものが14点でした。曾畠ムラの縄文人们は、こうした材を採集し、乾燥させ、カゴづくりをしていました。カゴの作り方は、現在とほとんど同じで、その技術の高さには驚かされます。これらは、曾畠ムラのカゴづくりの一コマを想像させてくれる品々です。

カゴの編み方

カゴの編み方には、縦材と横材を交互に編み込んでいく「網代編み」と、簾のように横材に縦材を絡ませて編んでいく「扱り編み」の2つの方法があります。曾畠貝塚低湿地遺跡で見つかったカゴは、全て網代編みでした。

編み方では、①1本越え・1本潜り・1本送り、②2本越え・2本潜り・1本送り、③2本越え・2本潜り・2本送り、④4本越え・4本潜り・2本送りの4種類が見られ、複数種類の編み方を組み合わせているものも見られます。



①



② かごの編み方



③



④

- ① 1本越え・1本潜り・1本送り
- ② 2本越え・2本潜り・1本送り
- ③ 2本越え・2本潜り・2本送り
- ④ 4本越え・4本潜り・2本送り

(「曾畠」より)



62. カゴ（A-2区出土）：曾畠貝塚低湿地遺跡

数千年の時を越えて

曾畠貝塚低湿地遺跡の21点のカゴは、約6000年前～3000年前の縄文時代前期から後期のもので、地下2.3～1.7mから見つかりました。低湿地ということもあり、数千年もの間、地中深く眠っていたカゴが現代に蘇った貴重な品々です。

数千年の時を越えて蘇ったこれらのカゴは、その保存に携わった多くの人々の想いが込められている品でもあります。それは、当時の調査報告書にも記されています。

『貯蔵穴』の造構の取り上げ作業

平面プランを確認した中で比較的の残存状態が良好である、第7号貯蔵穴をその対象にした。将来の調査が可能な状態で残すこと目的として、格安の経費で行うため、隣接地で工事を行っている建設会社の技術者と検討・協議を行いながら作業を進めた。

貯蔵穴の周囲に安全のため幾分余裕を取りながら、その大きさは、縦150cm×横150cm×深さ100cmであり、枠設置を含めた総重量は約3t以上と計算された。これに耐えうる最善の方法は、鉄枠をつくり、枠材は松材を使用、底板には、鋼材を使用して行うことになった。また、生じる隙間に山砂を入れ樹脂を注入して崩れの防止を図っている。

実際の作業は、建設業者の作業員4～5名で重機や簡単な建設道具を用いて、数時間のうちに終了して熊本県文化財収蔵庫（現熊本県文化財資料室）の倉庫に手際よく運搬されている。

『編み物製品類』の取り上げ作業

こちらは全く建設業者の手を煩わせることなく、調査員と発掘作業員の手により実施している。一部、細かい製品はこともなく取り上げることができ、大型のタッパーやコンテナに納めている。そして、化繊縫や適当な木材を用いて隙間を埋め固定を加えている。また、製品を洗い、実験的に毛質筆を用いてバインダーでの強化を試みている。これには、再度の土落とし・清掃作業が困難になるきらいがあり、以後取りやめている。

実施した方法は、安価な経費で、手作りの木箱に納めて取り上げる簡単な方法である。周囲に余裕を残し、土柱としての状態で寸法をはかり、木材店から購入した木材で底のない木箱を作りはじめ込むのである。隙間に水調合できるウレタン樹脂を注入すると、数時間で強固に固定が可能であった。固定作業が終了したのち、底を少しづつ削りながら、底板を打ち、さらに小角材で補強を加えている。底板を打つ作業には道板や一部、一輪車を用いることで終えることができている。

文化財収蔵庫（現熊本県文化財資料室）に運んだ編み物製品は、化繊紙で覆い適宜の散水が必要である。5%のホウ酸水を散布することにより、カビ・腐敗を防止し一年間の保管が可能であった。

以上の作業状況につき、次頁に写真説明を用意している。なお、編み物製品は、国庫補助事業を受け、全て専門業者に委託して保存処理を行うことに決定している。無事に保存処理されることを祈り、一堂に展示公開される日を待ちたい。

（『曾畠』より）

調査担当者の江本直らの「無事に保存処理がされることを祈り、一堂に展示公開される日を待ちたい。」という思いで、ここに蘇ったカゴは、私たちに様々なメッセージを語りかけてくれています。

【「貯蔵穴」造構の取り上げ作業状況】



①



②



③



④



⑤



⑥

- ① 業者により準備・運ばれた鉄枠を現場で組み立てる作業。
- ② 貯蔵穴造構は周囲に幾分余裕をとって、土柱状に削る作業。適宜、重機を使用。
- ③ 重機を用いて、鉄枠をはめ込む作業。
- ④ 鉄枠と貯蔵穴造構の間に、松板材をはめ込む作業。
- ⑤ 底面に横から鋼材を打ち込む作業（少しづつ削りながら）。隙間には山砂やウレタン樹脂を注入して固定化をかかる。
- ⑥ 固定作業が終了した後、重機を用いて運搬作業を行う。

【「編み物製品類」の取り上げ作業】



①



②



③



④



⑤



⑥

- ① 調査用器具を用いて編み物製品類を土柱状に残す作業。周囲は幾分余裕をとり崩れを防ぐ。一方、建材店で板材を購入し、対象物に合わせた底のない木箱を製作する。
- ② 底のない木箱をはめ込む作業。
- ③ 隙間に水調合を行ったウレタン樹脂を注入し、固定する作業。
- ④ 道板・角材・車のジャッキなどを用いて下面を支え安定させ、少しづつ底を削りながら底板を打ちつける作業。
- ⑤ 底板の打ちつけを終えた後、更に小角材を打ち補強を行う。
- ⑥ 底面の支柱をはずして終了。人力・一輪車で運搬を行う。

(「曾畑」より)



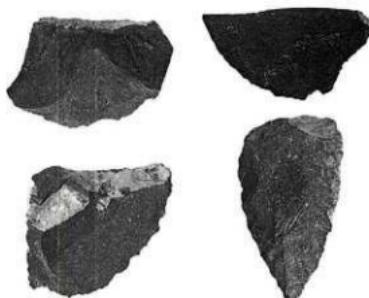
石を活かす

縄文人たちは、石を活かして、様々な道具を作っています。

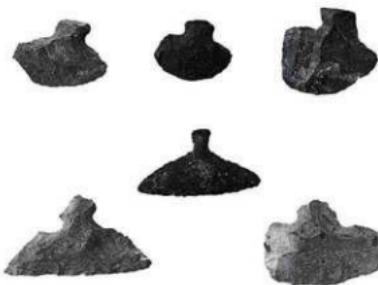
黒橋貝塚から見つかった2000点近い石器の数は、石が当時の生活道具の素材としての重要な役割を果たしていたことを示しています。

使われた石材も黒曜石、安山岩、サヌカイト、チャート、軽石、砂岩、蛇紋岩、緑泥片岩、千枚岩、石灰岩と様々です。縄文人たちの道具づくりは、こうした石材の特徴をうまく活かしながら、暮らしに必要な道具を作っています。

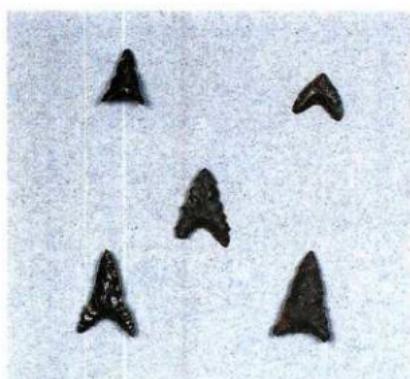
ここでは、彼らが残した石器の道具箱をのぞいてみましょう。



63. スクレーバー：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



64. 石匙：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



65. 石鏃：轟貝塚

狩りと石器

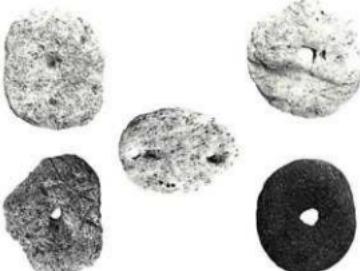
狩りの道具としての弓矢や槍。縄文人にとって、こうした石器づくりも重要な仕事です。

石鏃は、矢の先に取り付けられたものです。材料には、細工がしやすく、シャープな切れ味になる安山岩やサヌカイト、黒曜石やチャートが使われました。

石匙やスクレーバーは、仕留めた獣の皮を剥ぐ時に使われたものです。石匙には、蝶型と横型があり、どちらにもつまみが付けられ、紐を掛けて携帯用ナイフとしても使われていました。



66. 石錘：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



67. 軽石製浮子：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

漁労と石器

内海や川での漁を主とした網漁やヤス漁では、石の利用法も様々です。石錘は、錘として網にくくり付けたものです。紐が掛かりやすくなるように縁を打ち欠いて作っています。浮子は、仕掛けた網の目印として使われたものです。材料には、軽石が使われ、網に通すための穴が開けられています。



68. 石斧：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

木工と石器

四季折々の恵みを与えてくれる森は、一方で、家づくりや道具類の材料としての木材を与えてくれる場でした。

こうした木材を切り倒し、加工するための道具が、磨き上げられた石斧（磨製石斧）です。刀の部分が九ノミ状のものや全体が細く刃がノミ状のもの、刃先を蛤刃としたものなど、彼らは、その用途によって、使い分けていたのでしょう。



69. 石器：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

ありがたい石を求めて

黒橋貝塚から見つかった石器の石材のうち14%が黒曜石でした。使われた黒曜石は、熊本県の小国産はもちろん、長崎県の腰岳産、大分県の姫島産の3種類がありました。

黒橋ムラの绳文人たちが、よりよい石材を求めて、広範囲の人々と交流をしていたことを物語ってくれています。



骨を活かす

縄文人たちは、狩りや漁で得た獸や魚の骨や角を、道具の材料としても活かしています。様々な形があり加工がしやすく、しかも適度な硬さの骨や角は、彼らの想像力をより膨らませたことでしょう。彼らは、骨や角を使って、土器づくりなどに使うヘラや工具、簪など飾りや祭りの道具などを作っています。

食材とした獸の骨や角、魚の骨まで、無駄なく再利用する、リサイクル感覚には、感心させられます。



70



71



72



73

鹿角製工具：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

猪牙製ヘラ：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



75



76

74. 骨製簪：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

鹿角製簪：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

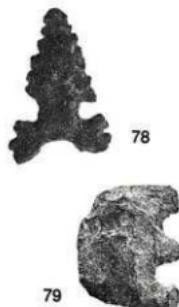
魚捕りの達人

黒橋貝塚や森貝塚から見つかった骨製の刺突具は、縄文人たちの魚捕りの様子を教えてくれる品です。

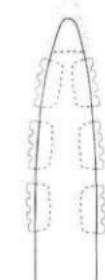
刺突具は、長い柄の先に付けられ、ヤスとして使われていました。この漁法は、今でも行われているものです。有明海の遠浅の海辺で、縄文人たちがヤスを片手に魚を狙い定める姿が想像されます。また、他の遺跡からは、現在の形とほぼ同じ釣針も見つかっています。



77. 骨製刺突具：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



石鋤：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



石鋤をつけた鉈
(推定図)

石鋤～大物をねらう～

石鋤は、その名のとおり、ノコギリ歯のような深い円凸を付けた縁の石器です。骨角器などに、この石鋤を幾つか付け大型の鉈として使います。こうした鉈で、鮫やイルカなどの大型の獲物を捕っていたのでは、と考えられています。

また、この石鋤は、西北九州独特のもので、対馬や朝鮮半島でも同じ形のものが見られるなど、当時の漁民たちの交流の一端も教えてくれる品です。



80. 石鋤：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

狩りの達人

冬の野山での狩りには、危険も伴っていたはずです。こうした中で、できる限り危険を避け、狩りを行うために考案出されたのが弓矢です。槍とは違い、弓矢は遠くから獲物をねらい仕留めることができます。黒橋貝塚からは、91点もの石鏃が見つかりっていることもこうしたことの物語っています。

また、黒橋貝塚からは、6頭以上の犬の骨も見つかっています。こうした犬は、狩りの供としての役割を果たしていたのかもしれません。



自然を活かす

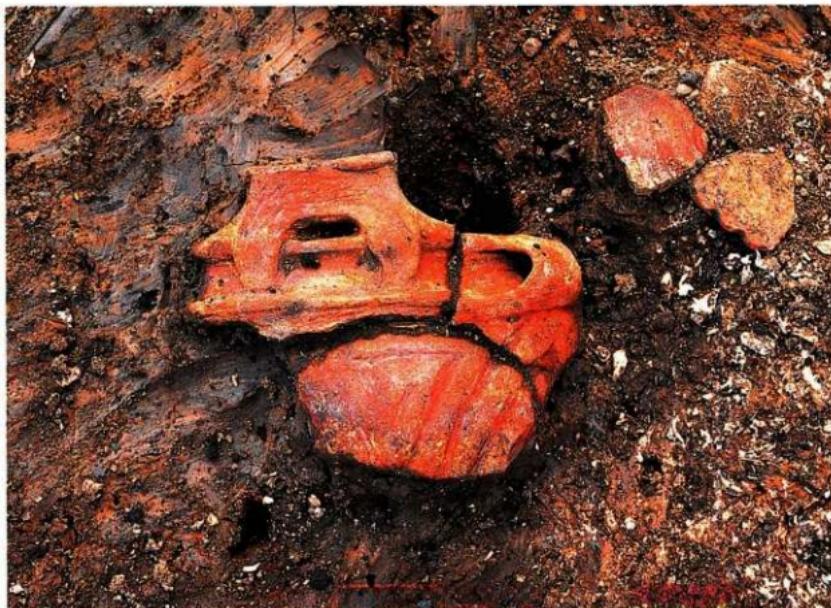
縄文人たちは、自然を活かす「巧み」さを持っていました。

- 生活の場である家づくりの材。
- 食料を得るための様々な道具類の材。
- 料理をするための様々な道具類の材。
- 貯えるための様々な道具類の材。

彼らは、こうした材料の全てを土、草木、石、獸の骨や角など自然の中から見いだし、様々な道具を作りだしています。その一つ一つは、彼らの「知恵」と「技術」が集約された品々ばかりです。

彼らは、自然の恵みを無駄なく活かす「知恵」を自然から学び、さらに様々な道具を作る「技術」を生活の中で身に付けていったのでしょうか。

こうした彼らの自然を活かす「巧み」さは、物に囲まれ豊かな生活を送っている私たちに何かを語りかけてくれているのかもしれません。



黒橋貝塚で見つかった土器
(提供:熊本県教育委員会)



雁回山より熊本平野を望む

コーナー3 「祈り」 ●

自然界から食材を得、また素材を活かして道具類を作っていた縄文人たち。

彼らのくらしは、様々な恵みを与えてくれる豊かな自然の中で成り立っていました。そんな豊かな自然も時には、台風や大雨、干ばつなどの自然災害をもたらします。

そんな中で、彼らは、豊かな自然に感謝すると同時に、絶対的な力を示す自然に対し畏れを抱いていたことでしょう。また、獵や漁への期待と不安、さらには、死や病気への畏れなどに対して、彼らは祭りや儀式を行い、祈りを捧げていたのでしょう。

ここでは、そうした彼らの「祈り」の一端を教えてくれる品々を見ていきましょう。

祈りの場

縄文時代の「ゴミ捨て場」と言われる貝塚。

しかし、貝塚からは、多くの埋葬された人骨も見つかっています。阿高貝塚からは約50体、黒橋貝塚からは18体、曾畠貝塚、森貝塚からも多数の人骨が見つかっています。

こうした埋葬された人骨は、全国各地の貝塚からも見つかっており、貝塚が単なる「ゴミ捨て場」ではなく「再生の場」「送りの場」としての意味もあったのではないかという指摘もあります。そんな儀式は、アイヌ民族の「イオマンテ」(熊送り)という熊の身体にやどる神を丁寧にあの世に送る儀式にも見られます。

貝塚からは、人間の魂の再生とともに、動植物の再生も願う縄文人の「祈り」が見え隠れしているようです。



81. 動物形土製品：阿高貝塚

自然で裝う

縄文人たちは、動物の骨、角や牙、貝などで身体を飾っています。

こうした装身具は、単なるアクセサリーとしてだけではなく、特別な意味があるものであったと考えられています。

髪飾り

髪飾りとしての簪。

骨や鹿の角などで作られ、髪を結い上げ、留めるためもので、ある程度弾力性のある骨や鹿の角などで作られています。片方が尖った鹿の角などを利用して、もう一方には、細かな刻みなどでデザインされているものも見られます。



82. 鹿角製簪：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



送りの痕跡 黒橋貝塚では一か所に集められたイノシシの下顎骨が見つかった。送りの様子を彷彿させる。
(提供：熊本県教育委員会)

耳飾り

縄文時代の耳飾りは、現在のピアスのように耳たぶに穴をあけてはめ込むタイプです。黒橋貝塚からは、サメの椎骨つばいこつで作った耳飾りが見つかっています。その大きさは、直径が1~2.5cm、厚さが0.35~1.1cmです。



83. 椎骨製耳飾：黒橋貝塚

垂飾り

黒橋貝塚からは、様々な首飾りに付けられた品が見つかっています。サメの歯やスズキの鰓骨くわいこつ、イノシシの牙などに穴をあけ、ひもに通して首飾りとしていました。中には、刻みなどの細工をし、装飾性に富んだ品もあります。

また、鹿の角などの大型のものは、腰こしに垂らしてつける腰飾りとして、使われていたと考えられています。

84. 鮫歯製垂飾：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)85. 鰭製垂飾：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)86
87
鹿角製垂飾：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



88. 猪牙製垂飾：黒橋貝塚

(提供：熊本県教育委員会)



89. 猪牙製垂飾：黒橋貝塚

(提供：熊本県教育委員会)



90. 大珠：黒橋貝塚



91. 大珠：黒橋貝塚



92. 大珠：黒橋貝塚

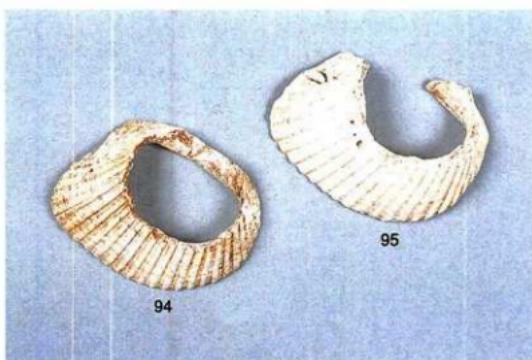
腕飾り

黒橋貝塚、阿高貝塚、森貝塚などからは、腕飾りとしての貝輪が見つかっています。貝輪の材料としては、アカガイやベンケイガイなどの大きな二枚貝が使われました。

森貝塚から見つかった今から約6000年前の埋葬された壮年の女性には、左腕にアカガイ、右腕にベンケイガイの貝輪が付けられていました。



93. 貝輪：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



貝輪：森貝塚



森貝塚の埋葬された女性
(提供：宇土市教育委員会)

貝面

阿高貝塚や黒橋貝塚からは、大型のイタボガキで作られた貝面せいめんが見つかっています。単なる装飾具ではなく、呪術的な儀式に用いられていたのではと考えられています。同じような貝面が韓国の東山洞貝塚からも見つかっており、その交流を物語るものとしても貴重なものです。



96. 貝面：阿高貝塚
(提供：熊本市立熊本博物館)



97. 貝面：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



自然への祈り

科学技術が発達した現代でも、地震や台風、火山噴火等の災害は、多大な被害をもたらし、自然の力の絶大さを私たちに見せつけます。そんな自然の急激な変化は、自然と共にくらしていた縄文人たちにとって、畏敬の念を抱かせる存在だったのかもしれません。

彼らは、そんな自然からの恵みである動物の骨や角、貝などを素材にして、身体を飾っています。それらは、単なる飾りとしてだけではなく、自然に対する祈りや願望も込めていたのかもしれません。

そんな彼らの自然に対する畏敬の念は、祭りや祈りという形になり、そこに彼らは安らぎを求めていたのかもしれません。縄文人たちの自然に対する姿は、私たちに自然と共に生きる心を伝えているようです。

ゾーンIII

宇城がたり

大の国の中山里に土器いちりはや十年はも過しけるかな

小林 久雄



モースが発掘した土器

宇城がたり

ページIII



モース先生がやってきた

エドワード・シルベスター・モース。

彼は、東京帝国大学に招聘されたアメリカ人の動物学者です。モースは、東京の大森貝塚を日本で初めて科学的な発掘調査をした人物として、「日本の近代考古学の父」と称されています。

しかし、そのモースが熊本の地を訪れていることは、あまり知られていません。それは、1879（明治12）年のことです。つまり、1877（明治10）年に行った大森貝塚調査の2年後には熊本を訪れています。その目的は、地質学者ライマンが紹介した「大野村の貝塚」の調査のためでした。

日本の近代考古学の父と称されるモースが大森貝塚調査の2年後に、すでに熊本の地、しかも貝塚調査に訪れていることは、熊本に住む私たちにとって誇らしきことです。

その時の様子をモースは、著書『Japan Day by Day (日本その日その日)』に記しています。



エドワード・シルベス・モース
(提供:平凡社)

翌朝我々は五時に出発した。そして人力車で、凸凹の極めて甚しい道路を二十四マイルという長い、身のつかれる旅をして、大野村へ着くと、ここには私がさがしていた貝塚がいくつかあった。道はそれ等の間を通っている。ここから海岸までは、すくなくとも五マイルある。この堆積はフロリダの貝塚の深さに等しく、即ちすくなくとも三十フィートはあるかも知れない。貝殻の凝固した塊はArca granosa(アカガイの種)から成っているが、他の貝の「種」もいろいろ発見された。
(中略)

我々は躊躇つ雨の中を大野村へ向かって出発したが、間もなくずぶ濡れになり、終日この状態のままでいた。我々は、かぎられた時間で出来るだけ完全に貝塚の調査をした。我々は沢山の骨を手に入れたが、その中には大森の貝塚に於ると同じく、食人の証痕を示す人骨の破片もあった。一本の人間の脛骨は並外れに平たく、指數五〇・二という、記録された物の最低の一つである。また異常な形の陶器も発見された。一つの浅い鉢には、矢の模様がついていた。

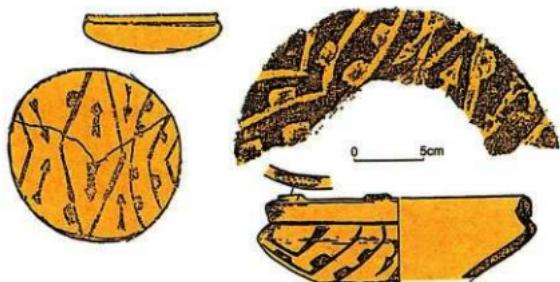
最初に私に大野村の貝塚の話をしてくれた地質学者ライマン教授は、貝塚附近に奇妙な石の椎のあることも話した。(後略)

(E・S・モース著『日本その日その日』より)

『日本その日その日』に「異常な形の陶器も発見された」と記された大野貝塚出土の縄文土器。関東地方の土器を見なれたモースにとっては、九州の縄文土器は、「異常な形」にうつったのでしょうか。



98. 南福寺式土器：大野貝塚でモースが発見した土器



大野貝塚の「異常な形の陶器」
『日本その日その日』に掲載された挿絵（左）。右は、八幡一郎が出土地不明と報告したモースコレクションの「肥後発見の一土器」の実測図。同一のものである。

大野貝塚

竜北町大野にある貝塚です。1879（明治12）年にモースによって、発掘調査が行われています。

その後、明治期に小学校が建てられた時に貝塚の大部分がこわされてしまい、その全貌は、明きらかになっていません。現在も廢校となつた校舎が残っていますが、その周辺や裏手の斜面の一部に貝殻を見ることができます。



大野貝塚（建物のある小高い丘の上）



肥後へ行こう

モースの大野貝塚発掘は、その後の九州縄文研究にも大きな影響を与えています。
明治期の考古学者で、1980（明治23）年に熊本の遺跡や遺物を調査した若林勝邦は、曾畠貝塚の調査のきっかけを次のように記しています。

「肥後ハ天艸ノ内海二望ミ九州西南端中央部ノ海岸ヲ有セルヲ以テ嘗テモールス氏ノ研究セシ大野村ノ貝塚ノ他ニ尚遺跡遺物數多クアルベキヲ信セシニヨレリ又モールス氏ノ大野村貝塚ノ研究報告ハ終ニ世ニ出ザリシニヨリ此地方ノ状態ハ充分知ルヲ得ザリシガ為メナリニ探求ノ報告ヲ記スベシ」
(若林勝邦著「肥後旅行談」『東京人類学会雑誌』5巻49号より)

と、若林はモースの大野貝塚調査をあげ、熊本の多くの貝塚や遺跡をさらに調査する必要性を感じています。いかに、大野貝塚の調査が、全国的にも注目を集めていたかをうかがわせる一文です。その後、多くの研究者が貝塚の調査のために、熊本を訪れる事となります。

京都帝国大学教授で、その後、総長となった濱田耕作（1881～1938）は、1919（大正8）年に森貝塚を、京都帝国大学教授の清野謙次（1885～1955）は、1920（大正9）年に城南町阿高貝塚、1922（大正11）年に松橋町大野貝塚、1923（大正12）年には嘉島町のカキワラ貝塚を、東京帝国大学助教授を退職して間もない鳥居龍蔵（1870～1953）は、1930（昭和5）年に御領貝塚を、戦後の1959（昭和34）年には、慶應義塾大学の江坂輝彌が、小林久雄ら肥後考古学会メンバーの支援を受けて、曾畠貝塚を本格的に発掘調査しています。この他、当時の一流の考古学者たちが、肥後を訪れました。熊本の貝塚は、考古学者たちを引きつけるほどの魅力いっぱいの遺跡だったのです。

こういった県内での調査は、地元の考古学者たちへ多くの影響を与えています。その一人が小林久雄です。



昭和5年の鳥居龍蔵の御領貝塚発掘
(『九州縄文土器の研究』より)

左端：鳥居龍蔵

ある考古学者の軌跡

小林久雄

小林久雄は、1895（明治28）年、熊本県下益城郡隈庄町（現城南町）で、江戸時代より代々医業を営む小林家の九代目として生まれました。

大学卒業後、久雄は、故郷に戻り、医者として町の人々を診ていきます。その一方で、久雄は、医業のかたわら、縄文研究へも力を注ぎ、九州の縄文研究をリードした人物としても知られています。また、晩年には、城南町の初代町長として、町政をリードするなど、郷土に根ざし、人々を引きつける魅力ある人でした。



小林久雄氏

〔九州縄文土器の研究〕より

考古学との出会い

久雄の考古学との出会いには、いくつかの偶然が重なっています。その一つは、久雄が、1914（大正3）年に入学した熊本医学専門学校で師事した解剖学の師、山崎春男との出会いでした。1916（大正5）年に浜戸川周辺でおこなわれた耕地整理の時に、多くの人骨が見つかり、阿高貝塚が発見され、山崎も調査メンバーに加わりました。当時21歳の学生だった久雄もその手伝いをすることになりました。

もう一つは、阿高貝塚の南一帯が小林家代々の土地ということでした。小林家の墓地は、阿高貝塚の上段にあり、六代目の周軒は、カキの貝殻に注目して「ほうれい」として粉末を医薬に用いていました。その曾孫の久雄が、阿高貝塚の調査に関わることになり、後にその土器に着目し、九州縄文土器の最初の編年を試みたことは、不思議な縁と言えます。

小林久雄氏略歴

明治28年（1895）	下益城郡隈庄町に出生
大正3年（1914）19歳	熊本医学専門学校入学
5年（1916）21歳	阿高貝塚発掘調査参加
6年（1917）22歳	轟貝塚発掘調査参加
7年（1918）23歳	熊本医学専門学校卒業。京都帝国大学医学部松浦内科勤務。
昭和5年（1930）35歳	鳥居龍藏らと御領貝塚発掘。その後、曾孫貝塚、大野貝塚、不知火貝塚を調査。
6年（1931）36歳	西平貝塚、長浜貝塚、大野貝塚調査
7年（1932）37歳	阿高貝塚、宮島貝塚、南福寺貝塚調査
9年（1934）39歳	沈目迎原遺跡調査
10年（1935）40歳	南福寺貝塚、二俣洞窟調査
14年（1939）44歳	「九州の縄文土器」を発表
15年（1940）45歳	頭地遺跡調査
24年（1949）54歳	小林行雄氏、坪井清足氏らと武貝塚調査
26年（1951）56歳	金間丈夫氏、坪井清足氏らと御領貝塚調査
29年（1954）59歳	糸石貝塚調査
30年（1955）60歳	城南町長就任
33年（1958）63歳	松橋町大野貝塚調査
34年（1959）64歳	肥後考古学会長就任
36年（1961）66歳	永眠

久雄と縄文研究

小林久雄は、生まれ育った隈庄町一帯やその周辺には、多くの貝塚があることを知り、考古学に興味を持ったようです。そんな環境の中で、久雄は、往診の帰りに、土器片などを収集しては、比較研究していました。

その後、熊本の考古学に大きな影響を与えた鳥居龍蔵の御領貝塚発掘調査に参加し、久雄の考古学への思いはより強いものとなっていきます。久雄は、開業医の余暇を割いて、自らも発掘調査を行い、1930（昭和5）年の曾畠貝塚をかわきりに、松橋町の大野貝塚や宮島貝塚、不知火町の不知火貝塚、竜北町の西平貝塚、宇土市の長浜貝塚、城南町の阿高貝塚や御領貝塚、水俣市の南福寺貝塚など、貝塚遺跡だけでもその数は11回にも及んでいます。

こうした発掘調査成果をもとに、1935（昭和10）年に発表したのが、「肥後縄文土器編年の概要」（『考古学評論』1巻2号）です。さらに1939（昭和14）年の「九州の縄文土器」（『人類学先史学講座』11巻）において、九州地方の縄文土器を前期、中期、後期の三時期に区分する土器編年案を発表しました。精力的に縄文研究を進めた久雄の情熱が感じられます。

また、1950（昭和30）年には、杉上、隈庄、豊田の3町の合併により誕生した城南町の初代町長として、『城南町史』の編纂を企画するなど、郷土に根ざした人としても異彩を放っていました。



左端：小林久雄
右端：坂本經堯

昭和10年の御領貝塚の発掘



後列中央：小林久雄

昭和11年の南福寺貝塚の発掘
（『九州縄文土器の研究』より）

● 縄文研究への想い

久雄は、縄文研究に情熱を燃やしました。

その集大成の一つが、「九州の縄文土器」です。九州で初めて、縄文土器の編年を作り上げたことは、その後の九州の縄文研究に大きな影響と進展をもたらしました。そんな研究手法的一面をのぞいてみましょう。

久雄は、生まれ育った城南町にある阿高貝塚・御領貝塚から見つかった土器を中心に土器の変化についてまとめました。

阿高貝塚と御領貝塚は、小さな谷をはさんで約150mの近距離にあります。ところが、阿高貝塚は、カキやハマグリといった鹹水産（海水産の貝）の貝が中心であるのに対し、御領貝塚は、ヤマトシジミといった汽水産（海水と淡水の混じり合った地域に生息する貝）の貝が90%以上を占めているのです。

久雄は、この貝の種類や割合の違いに着目しました。隣接している貝塚での貝の種類等の違いは、両貝塚が存在した自然環境が違うためだと考えたのです。そして、縄文海進や海退の影響を受け、両貝塚付近に生息する貝の種類が変化したこと、それは、両貝塚の年代に違いがあったこと、と結論付けました。久雄は、このことを次のように記しています。

「阿高貝塚の積成はこの附近の海洋が淡水の影響を受くること少なき時代に營まれ、其後漸次海岸線隆起し、浜戸川其他による淡水の影響が多くなり、鹹水貝の發育減じ淡水貝の発生し始めたる頃までに行はれたるものと解し得べく、御領貝塚に至りては阿高貝塚の末期より更に相当年代を隔てて、鹹水貝の発生全く停止し、蜆貝の發育に好適なる時期に成立し、長年月の間そ の住居となれるものと思はれる。」

（小林久雄「阿高貝塚及び御領貝塚の土器について」より）



99. 阿高貝塚出土土器片（大正5年）



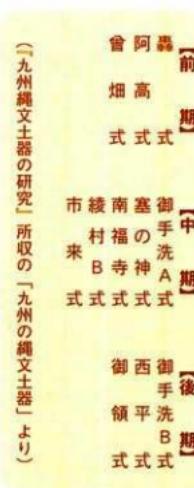
100. 阿高貝塚出土土器片（大正5年）

そして、阿高貝塚を標式遺跡とする「阿高式土器」と御領貝塚を標式遺跡とする「御領式土器」の新旧関係を以下のように考えました。

- ・阿高貝塚は、縄文海進時、海水面が上昇し、海水が内陸へと入り込んだ時に作られたもので、そのため、カキやハマグリといった鹹水産の貝が消費されていました。
- ・御領貝塚は、その後の海退により、海水面が下降し始め、浜戸川で淡水（真水）と海水が入り交じった時に作られたもので、そのため、ヤマトシジミといった汽水産の貝が消費されていました。

したがって、「阿高式土器」が古く、「御領式土器」が新しい。

そして、久雄は、阿高式土器と御領式土器、その間の土器について、その形や文様、作り方等を研究して、九州の縄文土器を前期、中期、後期の3つの時期に振り分けるという編年案を作り上げました。



阿高貝塚と御領貝塚 空中写真
（『九州縄文土器の研究』より）

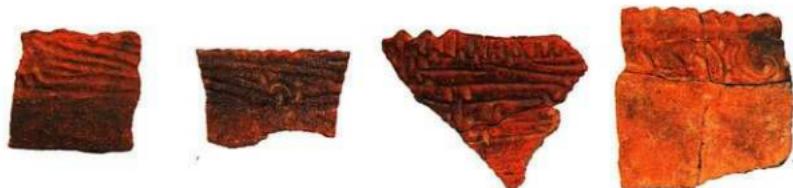
1. 阿高貝塚
2. 御領貝塚
3. 浜戸川

土器編年とは

現在、時間のものさしとして、「西暦〇年」「平成〇年」といったように、西暦や元号を使っています。この西暦や元号を使えば、正確に過去の時を示すことができます。しかし、縄文時代には、そうした時を表す基準がありません。そのため、考古学者は、遺跡から必ず見つかる「縄文土器」の形や材質、作り方、文様などをもとに、古い土器、新しい土器をふり分けました。これによって、作られたのが「土器編年」です。

縄文土器が使われた縄文時代は、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に分かれていますが、遺跡の時期を決める時には、土器編年が使われています。

小林久雄の九州縄文土器の編年



101. 阿高式土器片
(「九州縄文土器の研究」所収の「九州の縄文土器」より)



102. 阿高式土器：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)

あだか 阿高式土器

標式遺跡：阿高貝塚（城南町）

久雄は、阿高式土器の文様の特徴を太い凹線による曲線文で、押点文の雄健粗豪であるとしています。また、土器の形は、単純な深鉢形が多く、その他の形態の土器も簡単で素朴なもので、阿高式土器は、九州において独自な様相と発達をもっており、九州縄文土器編年で基本的な地位をしめる土器としています。



轟式土器拓本
(「九州縄文土器の研究」所収の「九州の縄文土器」より)

とどろきさき 轟式土器

標式遺跡：轟貝塚（宇土市）

久雄は、轟式土器の文様の特徴を貝殻で引っ搔いた条痕があり、また、阿高式土器の作りよりも劣っていることから、阿高式土器より先行する土器と考えています。しかし、阿高式土器、曾畠式土器、轟式土器が同時に出土することなどから、轟式土器については、将来検討すべきだとしています。



103. 轰B式土器：石の本遺跡
(提供：熊本県教育委員会)

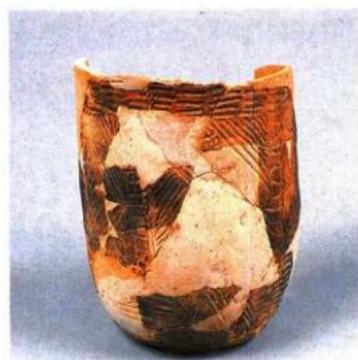


曾畠式土器拓本
(『九州縄文土器の研究』所収の「九州の縄文土器」より)

曾畠式土器

標式遺跡：曾畠貝塚（宇土市）

久雄は、曾畠式土器の文様の特徴を細い線で、縦横斜に羽状文、平行斜線文、三角文などを組み合わせた土器で、九州内の編年では、收まりきれない部分もあり、朝鮮半島との比較検討も必要としています。



104. 曾畠式土器：曾畠貝塚



105. 南福寺式土器片
(『九州縄文土器の研究』所収の「九州の縄文土器」より)

南福寺式土器

標式遺跡：南福寺貝塚（水俣市）

久雄は、南福寺式土器の文様の特徴を阿高式土器の曲線文、押点文は、痕跡を残すのみで、線も細くなり、直線文、S字状文へと変化しているとしています。



106. 南福寺式土器：黒橋貝塚
(提供：熊本県教育委員会)



御手洗A式土器

標式遺跡：御手洗遺跡（合志町）

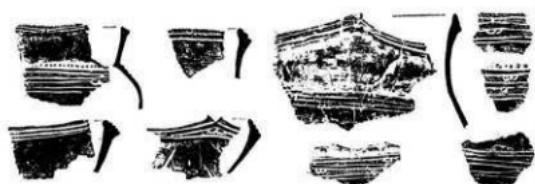
久雄は、御手洗A式土器の文様の特徴を爪形文、変様爪形文、連点文の文様をもち、口縁の隆起は、阿高式土器の癖を残しているとしています。

107. 御手洗A式土器片

(『九州縄文土器の研究』所収の「九州の縄文土器」より)



108. 御手洗B式土器片
（『九州縄文土器の研究』所収の「九州の縄文土器」より）



西平式土器拓本
（『九州縄文土器の研究』所収の「九州の縄文土器」より）

みたらい 御手洗B式土器

標式遺跡：御手洗遺跡（志吉町）

久雄は、御手洗B式土器の文様の特徴を渦文の曲線文は、阿高式に似ているが、線が小さく流麗な曲線となっていること、文様間に縄文があり、さらにその縄文を磨り消していること（磨消縄文）、とても薄手の土器であることをしています。

（現在は、鐘崎式土器として扱われています。）

にしがら 西平式土器

標式遺跡：西平貝塚（竜北町）

久雄は、西平式土器の特徴を磨かれていてツヤがあり、薄手で御手洗B式土器とよく似ているが、その違いは、口縁の形が「く」字形に画一され、文様が直線になったこととしています。



109. 御領式土器片
（『九州縄文土器の研究』所収の「九州の縄文土器」より）



110. 御領式土器：松橋大野貝塚

ごりょう 御領式土器

標式遺跡：御領貝塚（城南町）

久雄は、御領式土器の特徴を磨かれてツヤのある薄手の土器で、口縁の「く」字、山形隆起などが西平式と似ているが、山形隆起はやや低く、帯状平行直線文、平行横直線文となっているとしています。また、土器の形も鉢形、浅鉢形、広口壺形、など多くなり、複雑な形となっているとしています。

オジちゃんのめはゾウの目

郷土の歴史を愛し、それをもとに九州の縄文研究に大きな影響を与えた小林久雄。

彼は、後に新生城南町の初代町長として、『城南町史』を企画します。そこには、彼の郷土への思いと愛情が感じられます。

ここでは、彼と親交のあった藤森宗一の文章から、小林久雄のひととなりを感じて頂きたいと思います。

藤森が、小林のことを見はじめて知ったのは、『考古学評論』第一巻第二号を校正していたころです。その時のことを藤森は、後に以下のように記しています。

(前略) 私は考古学評論二号の校正をしていた。小林久雄、『肥後縄文土器編年の概要』という論文だった。私は、何となく森本さんにきいた。「この久は行の誤植ですね」きいた私がおどろくような激しい声がかえってきた。「れっきとした学士ですぞ。」森本さんの声は、心の中の何かが冒されたような烈しさだった。

その頃の森本さんは、かなりはげしく編年学を批判していた。いろいろなその研究者が嫌悪されて会（東京考古学会）から出ていった。（中略）その一方、小林さんの肥後の編年を強く支持していたのは、一つの奇現象といつてもよかった。

いったい、小林さんの何が森本さん的心をとらえていたのだろうか。（後略）

（『九州縄文土器の研究』所収の追憶集 藤森宗一「オジちゃんのめはゾウの目」より）

土器編年を強く批判していた森本六爾^{むりやま}が、久雄の編年を支持していたという奇現象を胸に、藤森は、九州への旅の際に隈庄町（現城南町）の小林久雄を訪ねました。その際に、久雄の人柄に接し、その時の様子を次のように記しています。

隈庄から

崖は今日もやみません。大隅行きは出航不能、断念して、熊本の隈庄町へ小林久雄さんを訪ねました。ここでも亡き森本さんは脈々と息づいています。小林さんは森本さんの残された仕事に対して、アクティブな意志を開陳してくださいました。肥後の縄文土器の編年資料、それから、弥生式にともなう石器の資料、いま、ぼくは九州の旅の総決算のような勉強をしています。

昨夜は更けるまで語りました。森本さんのこと、縄文式文化には縄文式文化の研究態度が明らかのこと、弥生式文化には弥生式文化の正しき研究態度が厳然たること、小林さんの象の眼が庄するように輝くのです。やがて、崖は台風に変りました。すごい音をたてて樹木は裂け、窓ガラスはとぶのです。二階の資料室の方で風にあおられたガラス戸があはれています。そこにぼくの十数日かの苦心の結晶がそのまま置いてあるのです。電灯は消えてしまって身動きできません。心配です。とうとうおそろしい一夜は寝返りのうちにあけました。

（藤森宗一『かもしかみち』より）

その後、小林と藤森の交流は続々、ある出来事をきっかけに、当時、藤森が住んでいた東京を小林が訪ねることとなります。

(前略) どう帰ってきたか、目黒駅まできて、二人で屋台に首をつっこんでナキソバを食った。「東京一うまか」と、鼻水をすりながら、小林さんはいった。私は、ソバをすりながら、氷のようなものが背筋を走った思いがした。

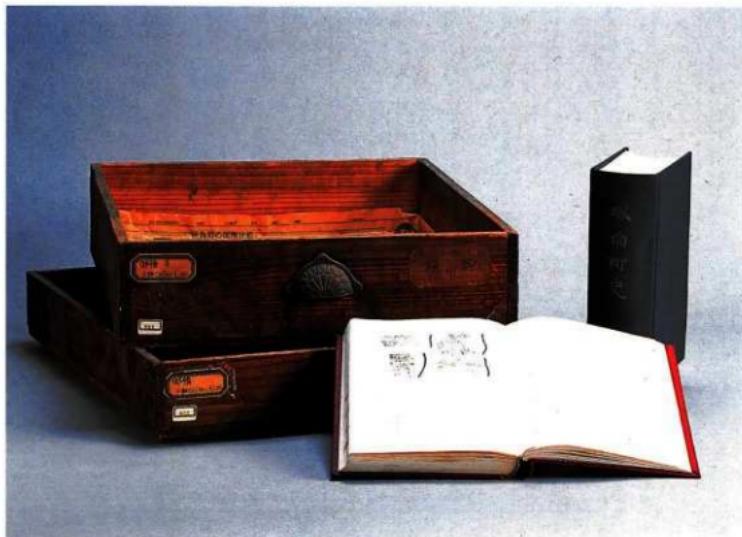
下目黒の二階の四畳半には、まだ赤々と電灯がついていた。変だなと思いながら昇ってみると、室内が目を赤くして、高い熱を出した長女をだいていた。小林さんの目がきらめき光りだして、私と室内は、ただハイハイと小林さんのいう通りに、下の台所との階段が熱くなるほど、湿布の湯をはこんだ。小林さんは、たえず湿布をかえ、子供の小さな身体を乗り伏せるように、じっと見つめ、いく本かの注射を打った。そして、そのまま朝がきた。

昼ごろ、「まあ、ようごわソ」と、やさしい目にかえった小林さんがいった。子供が目をあけた。私と室内がおそるおそるのぞき込むと、子供はじっと小林さんを見つめていた。そして、また目をつむった。しばらくして、「オジちゃんのめはゾウの目」といった。

その後、私はながいこと戦争に行き、帰ると信州へひっこんでしまったので、小林さんとのえにしは、ぶつりときたままになってしまった。なくなられてから、町長さんだったことも知った。

私は小林さんの学問について批判などしたくない。その気持ちは森本さんとおなじである。また、どんな手腕の町長さんだったかも知らない。私にとって、実はそんなことはどうでもいいのであって、寒い人間関係のない社会のために、あのあたたかい、やさしいゾウの目を、きびしくすえて、町長室にいたのだろうと小林さんを思いつかべるだけである。(後略)

(『九州縄文土器の研究』所収の追憶集 藤森栄一「オジちゃんのめはゾウの目」より)



111. 小林久雄 関連資料

「久」と「行」違い

また、「久雄」と「行雄」という一字違いでよく間違えられたという、後に京都大学の名誉教授となる小林行雄こばやしゆうおも、久雄について次のように追憶集に記しています。

(前略) それは、たしか昭和六年のことであった。まだ高工生の私は、なんの紹介状もなく、本山彦一翁を浜寺に訪問して、御所蔵の弥生式土器を実測させていただきたいとお願ひした。その時に紹介されたのが、たまたま同家に滞在しておられた熊本県の坂本経堯氏であった。そうして、坂本さんから、もう一人、隈庄に考古学に熱心なお医者さんがあるという話を聞きだしたのである。

坂本さんから教えてもらった重弧文土器のことは、「九州弥生式土器の一様式」と題して『考古学』第三卷第二号に発表したが、その原稿にそなえて、これを掲載するまえに、小林先生の原稿をもらってほしいということを、森本六爾氏に書き送った。小林先生の「肥後下益城郡隈庄出土の弥生式土器」という一文が『考古学』第三卷第一号(昭和七年)に掲載されたのは、その結果である。それが機縁となって、先生の原稿は、いくつも『考古学』にいただけたようになった。同じ雑誌に、久雄と行雄という一字ちがいの署名の原稿が掲載されるので、なかには誤植かと思った人があったかもしれない。事実、人類学会の会員名簿では、住所は私で名前は小林先生という、二人を一人にして一行ですまされたことであった。そういうことが、会えばまた酒のさかなになった。(中略)

ある時、小林先生は、令息に関するなにかの用で、学校へ出頭を求められた。往診の時間をさいて、済々齧の門をくぐった先生の眼にとまったのは、おりから校庭の一隅で弥生式土器の甕棺を掘りはじめていた下林先生の姿であった。ちょうどよいところへ来てくれたとばかりに、さっそく御二人は合口甕棺の発掘に熱中して、時間のたつことなどは意に介されなかった。ようやく土器を掘りあげて、おたがいに手を洗いながら、下林先生から、「今日はなんの用事で来校されたのか」と尋ねられて、ようやく小林先生は肝心の用を思い出されたという。

あるいは、この話は令息のことではなく、先生の弟さんに関することであったかもしれぬ。いずれにしても、この土器がもとになって、黒髪町式といいう一様式の存在を、私は知ることができたのである。黒髪町というのは、いうまでもなく済々齧の所在地である。(後略)

(『九州縄文土器の研究』所収の追憶集 小林行雄「日付のない追憶」より)

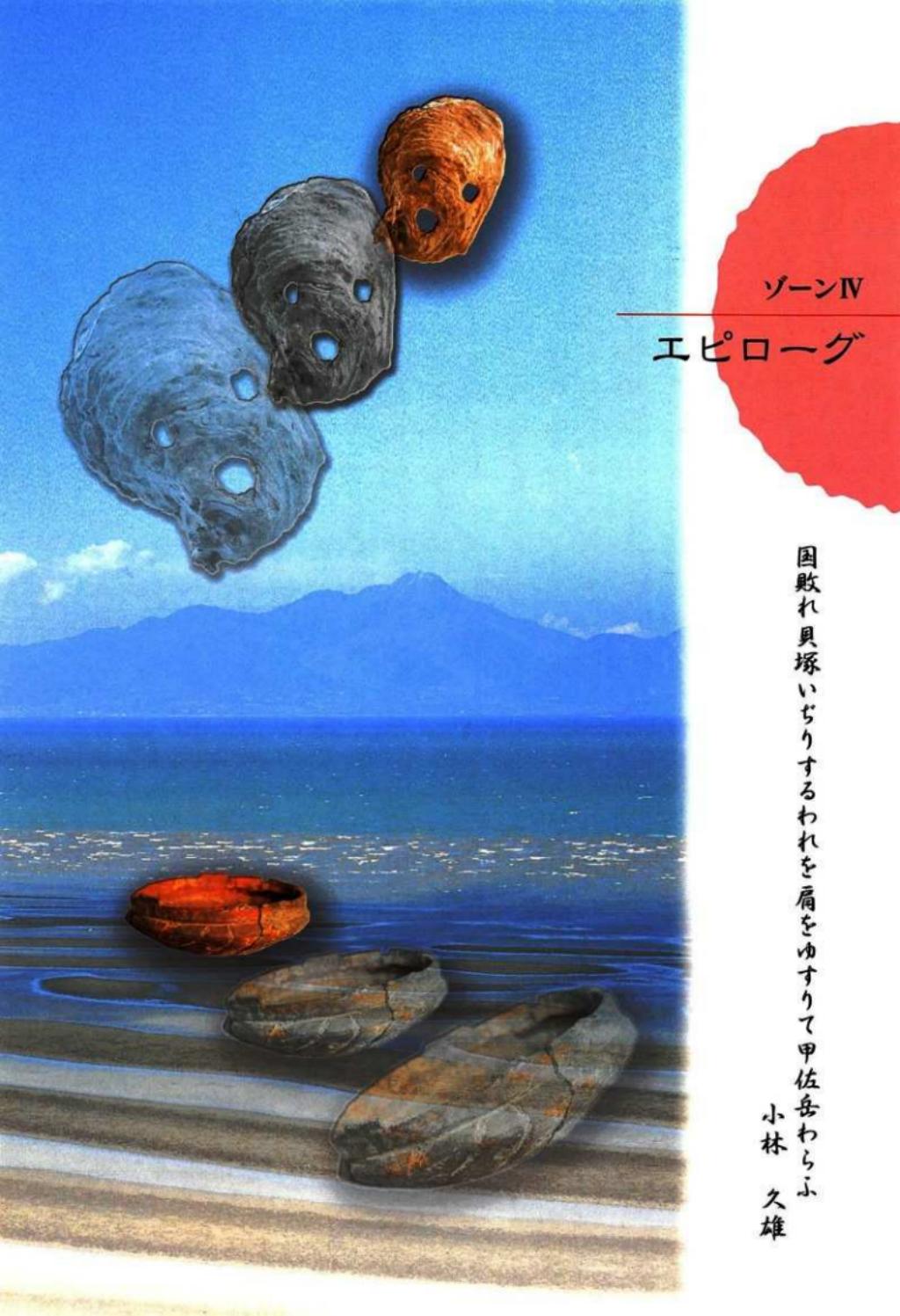


郷土に誇りを持とう

小林久雄は、郷土の資料をもとに編年を作り上げた考古学者、町の人々に温かく接した町医者、『城南町史』を企画した町長と多彩な顔を持っていました。また、多くの短歌を残すなど感性高い人でした。

人間味あふれる小林は、人との出会い、モノとの出会いを大切にし、郷土への思いを深めていきました。こうした小林の生き方は、人やモノとの出会いの大切さや郷土への思いなど、多くのことを私たちに教えてくれているようです。

皆さんも自分の郷土の歴史や自然、先人達の思いにふれてみませんか。



ゾーンIV

エピローグ

國敗れ貝塚いちりするわれを肩をぬりて甲佐岳わらふ

小林 久雄

エピローグ

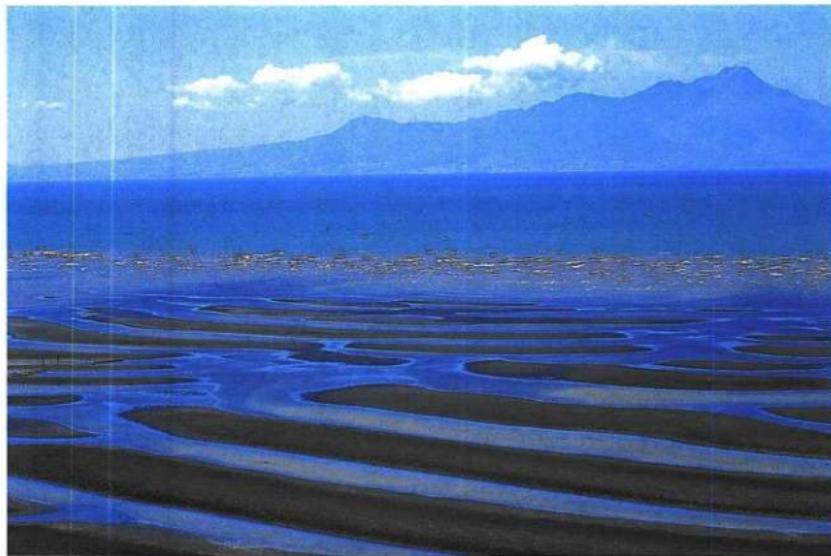
ゾーンIV

縄文人たちは、豊かな有明海や森から四季折々の恵みを得て、自然と共にくらしていました。それは、現代社会でくらしている私たちも同じです。

しかし、長い歴史の中で、私たちは最も身近な自然を顧みることを忘れてしまいました。その結果、有明海のノリの不作問題や水質の汚染、森林の減少などなど、多くの環境問題が生まれてくることになりました。

縄文人たちもそうであったように、現代社会に生きる私たちも自然の恵みなしには、くらしていくことはできません。

縄文人たちが残した宇城の貝塚群は、私たちに「豊かな自然とは」「人間と自然の共生とは」どうあるべきなのか、多くのことを語りかけてくれているのです。



有明海沿岸に広がる干潟

「字城謹成」関係略年表

年代	時代	今回取り上げた遺跡(貝塚)	当時の様子
約12,000年前	先土器時代	貴御 森貝塚 (宇土市)	姶良Tn火山灰が降る。 (24,000年前)
約8,000年前	中期	曾畠貝塚・低湿地遺跡 (宇土市)	土器・石器が使われる始める。
約6,000年前	中期	西岡台貝塚 (宇土市)	アカホヤ火山灰が降る。 (6,400年前)
約5,000年前	中期		最も観察べくなつた時期。 海水平面の上昇(現文海進)
約4,000年前	後期	黒地貝塚 (城南町)	気候が少しづつ冷涼化し、海水平面が下降していく。
約3,000年前	後期	阿萬貝塚 (城南町)	
約2,300年前	後期	御領貝塚 (城南町)	
	後期	松浦大野貝塚 (松浦町)	
	後期	西平貝塚 (竜北町)	
	後期	南福寺貝塚 (水俣市)	
	後期		このころ現在の海岸線が作られる。
	後期		水稻耕作が始まる。
	赤生時代		

出品目録

I プロローグ

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	法量(cm)	指定等	出品協力者
1	台付舟形土器	—	1	弥生時代後期	高20.3	国指定	城南町歴史民俗資料館
2	貝層剥ぎ取り断面	黒橋貝塚	1	縄文時代中期～後期	—	—	—

II 縄文との対話

恵み

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	法量(cm)	指定等	出品協力者
3	石 錐	黒橋貝塚	7	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
4	軽石製浮子	黒橋貝塚	5	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
5	骨製刺突具	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長5.7/幅0.5/厚0.45	—	熊本県教育委員会
6	骨製刺突具	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長9.4/幅0.6/厚0.5	—	熊本県教育委員会
7	曾畠式土器	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	口径(20.9)/高21.7	—	熊本県教育委員会
8	石皿・磨石	黒橋貝塚	1/2	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
9	石 匙	轟貝塚	6	縄文時代前期	—	—	宇土市教育委員会
10	スクレーパー	轟貝塚	5	縄文時代前期	—	—	宇土市教育委員会
11	糞 石	黒橋貝塚	10	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
12	石 蠍	轟貝塚	10	縄文時代前期	—	—	宇土市教育委員会
13	53号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(38.0)/横(35.0)	—	熊本県教育委員会
14	石皿・磨石	黒橋貝塚	1/2	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
15	解体痕のある獸骨	黒橋貝塚	3	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
16	削 器	黒橋貝塚	3	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
17	石 匙	黒橋貝塚	5	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
18	瓢 筆	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦19.0/横14.0	—	熊本県教育委員会

恵み

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	法量(cm)	指定等	出品協力者
19	20号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(23.0)/横(30.0)	—	熊本県教育委員会
20	力 ゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(30.0)/横(24.5)	—	熊本県教育委員会
21	阿高式土器	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	口径(31.1)/高28.2	—	熊本県教育委員会
22	阿高式土器	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	口径32.8/高27.1	—	熊本県教育委員会
23	石 斧	黒橋貝塚	5	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
24	石皿・磨石	黒橋貝塚	1/2	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
25	石 蠍	黒橋貝塚	5	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会
26	ヤ ス	轟貝塚	6	縄文時代前期	—	—	宇土市教育委員会
27	骨製 ハラ	黒橋貝塚	6	縄文時代中期	—	—	熊本県教育委員会

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	法量(cm)	指定等	出品協力者
28	貝 輪	阿高貝塚	1	縄文時代中期	長8.0/幅5.8/厚0.5		熊本市立熊本博物館
29	貝 輪	阿高貝塚	1	縄文時代中期	長8.3/幅6.2/厚0.5		熊本市立熊本博物館
30	阿高式土器	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	口径28.4/高30.2		熊本県教育委員会
31	阿高式土器	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	口径(19.8)/高11.3		熊本県教育委員会
32	中津式土器	黒橋貝塚	1	縄文時代後期	口径16.8/高13.1		熊本県教育委員会
33	縄文土器	黒橋貝塚	1	縄文時代後期	口径23.9/高14.2		熊本県教育委員会
34	御領式土器	御領貝塚	1	縄文時代後期	口径20.1/高16.6		城南町歴史民俗資料館
35	曾畠式土器	曾畠貝塚	1	縄文時代前期	口径(12.5)/高12.2		宇土市教育委員会
36	曾畠式土器	曾畠貝塚	1	縄文時代前期	口径(36.6)/高(36.4)		宇土市教育委員会
37	船元式土器	西岡台貝塚	1	縄文時代中期	口径23.0/高25.8		宇土市教育委員会
38	鯨骨	西岡台貝塚	1	縄文時代前期	—		宇土市教育委員会
39	鯨骨	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
40	土器底部(鯨骨痕)	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	底径11.0		熊本県教育委員会
41	土器底部(木の痕)	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	底径13.8		熊本県教育委員会
42	土器底部(鯨骨痕)	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
43	土器底部(木の痕)	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
44	土器底部(木の痕)	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	底径14.2		熊本県教育委員会
45	植物のツル	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(21.0)/横(26.0)		熊本県教育委員会
46	植物のツル	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(13.0)/横(15.0)		熊本県教育委員会
47	54号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(59.0)/横(45.0)		熊本県教育委員会
48	34号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(36.0)/横(60.0)		熊本県教育委員会
49	12号貯蔵穴 ツル	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(40.0)/横(39.3)		熊本県教育委員会
50	42号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(42.0)/横(43.0)		熊本県教育委員会
51	43号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(23.7)/横(25.8)		熊本県教育委員会
52	25号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(24.0)/横(19.5)		熊本県教育委員会
53	39号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(30.0)/横(35.0)		熊本県教育委員会
54	47号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(72.0)/横(70.0)		熊本県教育委員会
55	力ゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代後期～晩期	縦(32.0)/横(49.0)		熊本県教育委員会
56	12号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(28.0)/横(23.0)		熊本県教育委員会
57	植物のツル	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(45.0)/横(37.0)		熊本県教育委員会
58	14号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(60.0)/横(80.0)		熊本県教育委員会
59	62号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(48.0)/横(55.0)		熊本県教育委員会
60	9号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(84.0)/横(76.0)		熊本県教育委員会
61	36号貯蔵穴 カゴ	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(73.0)/横(50.0)		熊本県教育委員会
62	カゴ(A-2区出土)	曾畠貝塚 低湿地遺跡	1	縄文時代前期	縦(22.0)/横(26.0)		熊本県教育委員会
63	スクレーバー	黒橋貝塚	4	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	法量(cm)	指定等	出品協力者
64	石匙	黒橋貝塚	6	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
65	石鐵	轟貝塚	5	縄文時代前期	—		宇土市教育委員会
66	石鍤	黒橋貝塚	8	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
67	軽石製浮子	黒橋貝塚	5	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
68	石斧	黒橋貝塚	5	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
69	石器	黒橋貝塚	8	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
70	鹿角製工具	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長11.9/幅2.5/厚1.7		熊本県教育委員会
71	鹿角製工具	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長9.2/幅1.9/厚2.1		熊本県教育委員会
72	猪牙製ヘラ	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長18.1/幅1.7/厚1.7		熊本県教育委員会
73	猪牙製ヘラ	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長7.5/幅1.8/厚0.8		熊本県教育委員会
74	骨製簪	黒橋貝塚	3	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
75	鹿角製簪	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長11.8/幅1.6/厚1.8		熊本県教育委員会
76	鹿角製簪	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長8.1/幅1.4/厚0.4		熊本県教育委員会
77	骨製刺突具	黒橋貝塚	4	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
78	石鋸	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長(5.0)/幅(3.3)/厚0.55		熊本県教育委員会
79	石鋸	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長1.95/幅1.6/厚0.35		熊本県教育委員会
80	石鐵	黒橋貝塚	10	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会

新規

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	法量(cm)	指定等	出品協力者
81	動物形土製品	阿高貝塚	1	縄文時代中期	長(9.5)/高(8.2)		熊本市立熊本博物館
82	鹿角製簪	黒橋貝塚	5	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
83	椎骨製耳飾	黒橋貝塚	8	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
84	鰐歯製垂飾	黒橋貝塚	4	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
85	鰐製垂飾	黒橋貝塚	6	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
86	鹿角製垂飾	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長9.9/幅2.2/厚1.8		熊本県教育委員会
87	鹿角製垂飾	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長6.0/幅2.5/厚1.8		熊本県教育委員会
88	猪牙製垂飾	黒橋貝塚	6	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
89	猪牙製垂飾	黒橋貝塚	6	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
90	大珠	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長8.5/幅3.6/厚1.8		熊本県教育委員会
91	大珠	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長(3.8)/幅2.6/厚1.3		熊本県教育委員会
92	大珠	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長7.2/幅3.1/厚0.75		熊本県教育委員会
93	貝輪	黒橋貝塚	5	縄文時代中期	—		熊本県教育委員会
94	貝輪	轟貝塚	1	縄文時代前期	長9.5/幅7.2/厚0.9		宇土市教育委員会
95	貝輪	轟貝塚	1	縄文時代前期	長9.7/幅7.5/厚0.6		宇土市教育委員会
96	貝面	阿高貝塚	1	縄文時代中期	幅14.2		熊本市立熊本博物館
97	貝面	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	長13.2/幅15.5		熊本県教育委員会

III 宇城がたり

No.	資料名	遺跡名	数	時代・時期	法量(cm)	指定等	出品協力者
98	南福寺式土器	大野貝塚	1	縄文時代後期	口径(19.1)/高6.9		東京大学総合研究博物館
99	阿高貝塚出土土器片	阿高貝塚	10	縄文時代中期	—		熊本市立熊本博物館
100	阿高貝塚出土土器片	阿高貝塚	4	縄文時代中期	—		熊本市立熊本博物館
101	阿高式土器片	—	4	縄文時代中期	—		城南町歴史民俗資料館
102	阿高式土器	黒橋貝塚	1	縄文時代中期	口径(28.0)/高34.5		熊本県教育委員会
103	轟B式土器	石の本遺跡	1	縄文時代前期	口径(27.4)		熊本県教育委員会
104	曾畠式土器	曾畠貝塚	1	縄文時代前期	—		宇土市教育委員会
105	南福寺式土器片	—	3	縄文時代後期	—		城南町歴史民俗資料館
106	南福寺式土器	黒橋貝塚	1	縄文時代後期	口径22.8/高21.9		熊本県教育委員会
107	御手洗A式土器片	御手洗遺跡	10	縄文時代後期	—		熊本市立熊本博物館
108	御手洗B式土器片	御手洗遺跡	8	縄文時代後期	—		熊本市立熊本博物館
109	御領式土器片	—	2	縄文時代後期	—		城南町歴史民俗資料館
110	御領式土器	松橋大野貝塚	1	縄文時代後期	口径20.1/高16.6		城南町歴史民俗資料館
111	小林久雄関連資料	—	—	—	—		城南町歴史民俗資料館他

【参考文献】

- 熊本県城南町 1965 『城南町史』
 熊本県益城町 1990 『益城町史 通史編』
 熊本県宇土市 2002 『新宇土市史 資料編第二巻』
 熊本県城南町教育委員会 1978 『阿高貝塚』
 熊本県城南町歴史民俗資料館 1985 『小林コレクションI』
 熊本県城南町歴史民俗資料館 1987 『小林コレクションII』
 熊本県宇土市市教育委員会 1985 『西岡台貝塚』(宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集)
 熊本県教育委員会 1976 『黒橋』(熊本県文化財調査報告第20集)
 熊本県教育委員会 1976 『微雨・曾畠』(熊本県文化財調査報告第19集)
 熊本県教育委員会 1988 『曾畠』(熊本県文化財調査報告第100集)
 熊本県教育委員会 1998 『黒橋貝塚』(熊本県文化財調査報告第166集)
 九州繩文研究会 2001 『九州の貝塚』
 小林久雄 1967 『九州繩文土器の研究』(小林久雄先生遺稿刊行会)
 E.S.モース(石川欣一訳) 1970 『日本その日その日2』(平凡社)
 E.S.モース(石川欣一訳) 1971 『日本その日その日3』(平凡社)
 渡辺誠 1983 『縄文時代の知識』(東京美術)
 江坂輝彌・渡辺誠 1988 『装身具と骨角製漁具の知識』(東京美術)
 戸沢充則編 1989 『縄文人と貝塚』(六興出版)
 藤森崇一 1967 『かもしかみち』(学生社)
 藤森崇一 1967 『かもしかみち以後』(学生社)
 渡辺誠 1996 『よみがえる縄文人』(学習研究社)
 木崎康弘 2004 『豊饒の海の縄文文化 曾畠貝塚』(新泉社)

【協力機関及び協力者一覧】

宇土市教育委員会、熊本市立熊本博物館、城南町歴史民俗資料館、
 東京大学総合研究博物館
 謙訪元、清田純一、高木恭二、富田紘一、豊崎晃一、西秋良宏、藤本貴仁、
 水ノ江和同、美濃口紀子(五十音順)

熊本県立装飾古墳館

平成16年度後期企画展示

肥後の至宝展Ⅲ

宇城語展 ～貝塚からのメッセージ～

発行日：2005年1月25日

発 行：熊本県文化財保護協会

〒862-0970 熊本県熊本市渡鹿3-15-12

TEL:096-362-9491（県文化財資料室内）

編 集：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原3085番地

TEL:0968-36-2151 FAX:0968-36-2120

印 刷：株式会社 協和印刷

〒868-0408 熊本県球磨郡あさぎり町免田東1496番地20

TEL:0966-45-1119 FAX:0966-45-1213

印刷使用

版型／A4版

頁数／68頁

組版／フォント（10.3ポイント 明朝基本）

印刷／オフセット印刷

製版／スクリーン線数200線で製版

用紙／表紙（スーパーアート4/6判200kg）

本文（上質コート4/6判110kg）

製本／左無線綴じ

平成十六年度後期企画展示
肥後の至宝展Ⅲ



2005

熊本県立 装飾古墳館

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第18集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：宇城語展

発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話：0968-36-2151

URL：<http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日